

だんまり石

真夏の太陽が、じりじりと照りつける
街道を、山のように石を積んだ荷車が、
何台も連なってやってきます。

「暑い、暑い。」

「もうだめだ。」

「ちよつと休ませてくれ。」

「のどがからからだ。」

「水をのませてくれ。」

石を運ぶ人足は、ほこりとあせにまみ
れ、まるで頭からどろ水をかぶったよう
です。

けれども、監督のさむらいは、休ませ
てくれません。

「がんばれ、なまけるな。」

と、言い続け、むちをふるだけです。

荷車のかげが、長くのびはじめました。
どうしても、あの夕日がしずむまでに、

この石を名古屋のお城まで運ばなければ
ならないのです。さむらいは、自分もあ
せでぐつしよりになりながら、むちをふ
り、

「それ引け、それ引け……。」

と、大声をかけています。

そのときです。先頭の荷車の、一番上
にのっていた石が、ごろんと道ばたに落
ちてしまいました。

「気をつけろ、大事な石じゃ。落とすど
は何事だ。」

さむらいは真っ赤な顔をしておこりま
した。

「こまったなあ。」

「こんな大きな石……。」



「どうしよう。」

「車にのせることができるかなあ。」

人足たちはがんばりましたが、石は動きません。

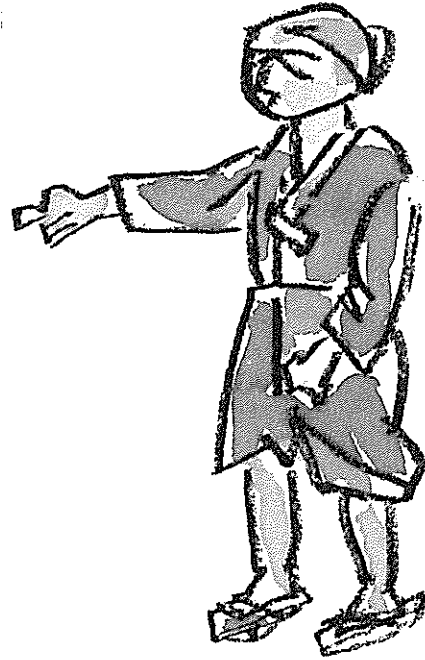
ひと休みしてから、もう一度のせようとしましたが、石はびくともしません。

さむらいは、あきらめて、

「こんな石、一つぐらいはいい。」

と言つて、早くお城へ行こうと人足たちをせきたてました。

しかし、さむらいは、その石のことが気になってしかたがありません。後からお城の役人に見つかつてはたいへんです。



さむらいは、村の庄屋しやをよび、近くにいる村人を集めて言いました。

「いいか、おまえたち。もし、お城の役人がこの石のことを調べに来て、何もしゃべつてはならんぞ。」

「もし、うかつなことをしゃべつたら…」と、ひと息いれてから、

「重いばつにあわせてやるぞ。よいな。」と、こわい顔で、にらみつけました。

村人をおどしたさむらいは、荷車を引かせて行つてしまいました。

村人は、庄屋をかこんで、みんなで話し合いました。そして、お城の役人が来ても、ぜつたいに何もしゃべらないことをやくそくしました。

二、三日は何もありませんでした。村人は、もう役人は来ないのではないかと思いはじめていました。

飲もうとしたのでした。

馬は、長い間水を飲んでいました。

馬にまたがついていた役人も、あせをふくために、小川に下りてきました。

手ぬぐいで首すじをふいて出かけようとした役人は、道ばたにわらが積んであるのに気がつきました。

「役人よ、早く通りすぎてくれ。」

「あの石に気づかないように。」

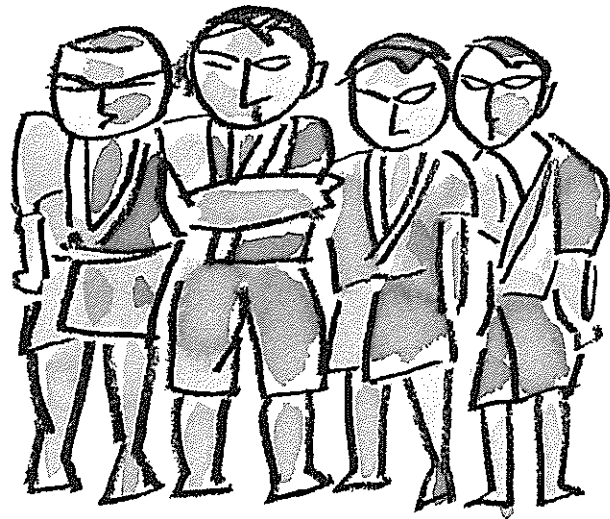
と、いのつていました。

役人が通りすぎようとしたときです。

いちばん後ろの馬の足音が止まりました。

びくつとした村人は、草取りの手を止めました。わらでかくしておいた石が見つかったのではないかと思いましたが、ちがうことがすぐに分かりました。

長い道のりを走ってきた馬が、小川の流れを見てのどがかわいたらしく、水を



役人がわらをはらいのけると大きな石が出てきました。草取りをしている村人は、役人に何を言われるかと、びくびくしていました。

役人は、村人に向かって、

「この石はどうしたのじゃ。」

と、話しかけました。

村人は、だれも頭を上げず、草取りをしています。役人は、今度は大声でどなりました。

「おい、この石はどうしたのじゃ。」

村人はせっせと草取りをしています。

「なんだ、こいつは、耳が聞こえないのか。」

と、少し後ろの方にいる女に向かってたずねましたが、その女もだまって草取りをしているだけでした。

いらいらした様子の役人は、向こうの田んぼにいる男をよびました。

「おうい、この石はどうしたのじゃあ。」

この男も、知らないふりで仕事を続けています。



「なんだ、こいつも聞こえないのか。」

「おまえも、聞こえないのか。」

役人は、

「これじゃ、どうしようもないわ。」

と、あきらめて、馬にまたがり、村外れに向かってかけていきました。

馬のひづめの音が聞こえなくなると、

小屋のかけや、土手の下から、二人、三

人……と村人たちが出てきました。

「うはは、うはは。」

「うへへ、うへへ。」

だれからともなくわらい出しました。